

CMA×PBダブル資格者に聞く、 プライベートバンカー資格

超高齢社会に突入した日本では、相続や事業承継といった課題に直面する富裕層・企業オーナーも多く、このような課題に取り組むプライベートバンカーの存在は、近年欠かせないものとなっています。

事業全体の流れをつかみ、その分析やビジョンの立て方、差別化の方法、上場企業の財務諸表からリスクを読み取る識別眼、アナリストレポートで会社の意図を投資家に伝えるための表現方法など、証券アナリスト的観点や経験は、企業オーナーへのコンサルティングはもちろん、あらゆる分野で生きるスキルです。

CMAでありかつPB資格を取得された会員の皆様にご登場いただき、受験の経緯やダブル資格の活用、また受験した感想等について、お話を伺います。

1. 都市銀行の受託・引受業務時代にCMAを取得

都市銀行の資本市場部で受託・引受業務に従事

1980年に大学を卒業して、都市銀行に入行しました。営業店の2カ店で基本的な銀行業務や人事採用を経験した後、1988年から資本市場部で社債などの受託業務や公共債の引受業務を担当しました。

1970年代から始まっていた日本の金融・資本市場の自由化は、外為法改正や社債市場の規制緩和・自由化など1980年に入って大きく進みはじめ、ダイナミックな変化が生じていました。従来の銀行業務にはないダイナミックな変化・動きがあるマーケット関連業務に魅力を感じて、CMAの勉強を開始、1990年に資格を取得しました。

直接アナリストとしての仕事をしていただけではありませんが、以降、銀行を辞めるまでのほとんどの期間、資本市場部で業務に従事していました。



奈良中央信用金庫 常務理事
平野 吉伸 氏
CMA×シニアPB

2. 都市銀行を退職し地元の信用金庫へ転身

地元の信用金庫で資金運用業務を継続

都市銀行での約23年間の勤務の後、出身地の奈良にある現在の信用金庫に転職しました。これは地元の金融機関であったことに加えて、たまたまご縁があったこと、また資金運用を行う人間が求められていたこと、自身としてもマーケットに関わる仕事を続けたいという思いを持っていたことなどいろいろな偶然も重なり、転身することを決めました。

以来、約15年にわたり信用金庫で資金運用業務を中心とした仕事を続けています。

CFPとシニアPB資格を取得

現在の金庫でも担当はほとんど資金運用に関する業務であり、個人業務との関わりはほとんどなかったのですが、顧客層の高齢化に伴い、当金庫においても特に地元の資産家や企業のオーナーからの資産保全や相続・事業承継に関するニーズの高まりを意識するようになっていました。

CFPは将来のことも考えて2012年に取得していましたが、自身のキャリア的にもより具体的な次のステップの必要性を感じていました。

協会がPB資格制度が開始されたことは知っていましたが、還暦を迎えたこと、「ライフシフト 100年時代の人生戦略」(リンダ・グラットン/アンドリュー・スコット著 東洋経済新報社)を読んだことをきっかけにしてPBの学習をスタートしました。自分はCMAですので受験資格のあるシニアPBに2018年春からトライし、合格することができました。

取得してみてもわかったFP資格とPB資格の違い

CFPで学んだ知識は相当幅広い分野に及びますが、シニアPBにおいて必要とされる知識はそれに加えて、より深さが求められます。また知識の習得とともに、資産運用でも事業承継でも顧客の課題を総合的に判断して政策的にどのように取り組むかといった、提案・意志決定に必要な勘所が押さえられると感じました。

さらに、より実践的な試験である筆記試験での「投資政策書」の作成には、幅広い個々の分野の知識だけでなく、そうした知識を統合して顧客の全体を見渡すことが求められます。「投資政策書」を作成することは、より高い総合的な視点から顧客の心に響く具体的な提案を可能とすることに非常に役立つのではないかと思います。

3. ダブル資格者として

CMAがアナリスト・リサーチ業務で一生食べていくことは難しい

CMAの皆様がアナリストやリサーチ業務のキャリアを一生続けていくことは、限られた方以外はかなり難しいのではないかと思います。CMAの資格取得者でしたら、それまで培った資産運用やファイナンスの知識や経験を活かし、さらにPBの知識を身につけて、個人へのアドバイス業務の可能性も検討してみたいはいかがでしょうか。

現に米国には数万人から数十万人のFPやIFA（独立系金融アドバイザー）が活躍しているとも言われています。日本においては未だその十分の一から数十分の一程度で、ブルーオーシャンとも言えるのではないのでしょうか。

地方でも今後はフィー型アドバイザーへのニーズが高まるのでは

一方、日本には1,800兆円を超える個人金融資産が蓄積されています。世界的にも米国に次いで第2位の残高ですが半分以上が預貯金で、「貯蓄から投資へ」と叫ばれ続けているものの、未だに投資への流れは進んでいないのが現状です。

金融庁の金融行政方針などにおいても、フィデューシャリー・デューティーが大きく掲げられる時代となりましたが、私見では銀行も証券も、まだまだ金融商品の売買によるコミッションを稼ぐビジネスモデルからなかなか脱却できず、顧客から十分な信頼感を得るまでには至っていないように感じます。

今後は独立した立場から、コミッションを収益源としない完全フィー型モデルで個人の資産運用をアドバイスするIFAへのニーズが、地方でもさらに高まるのではないのでしょうか。これまで独立系金融アドバイザーとなる際の課題としては顧客管理・注文執行など固定費の負担が大きかったのですが、SBI証券や楽天証券等がIFAのためのプラットフォームの提供を始めており、ある程度の水準の預かり資産は必要であるものの、以前と比べれば独立系金融アドバイザーを始めるハードルはかなり下がったのではないかと思います。

激変する環境下で培った経験を活かし、生涯現役を貫いていきたい

私が金融の仕事をはじめた1980年は、外為法が改正された年でもあります。それ以降、金融市場は自由化が進み様々な金融制度が大きく変わりました。また、リーマンショック、東日本大震災などマーケットが大きく変動する怖さも十分に経験してきました。このように激変する環境の中での30年近くに及ぶ金融・資本市場における経験、また機関投資家として信用金庫での15年を超える資金運用の経験の積み重ねは貴重な財産となっています。

これらの経験をもとに金融財政事情研究会様より、「地域金融機関の資金運用とリスク管理」「地域金融機関における資金運用の高度化（編著）」という2冊の本を出版し、様々な場所での講演やセミナーも行ってきました。

私自身も近い将来、退職の時期を迎えます。「人生100年時代」と言われる現在、これまでの様々な経験を活かし、「生涯現役」を目指したいと思っています。どのような形になるかはまだわかりませんが、地域金融機関の資金運用やリスク管理、また、FP業務や個人の資金運用に関わるIFA業務・より幅の広いプライベートバンキング業務などをライフワークとして、これまでの様々な経験を何らかの形で社会に還元し、「生涯現役」を貫いていきたいと考えています。

★「CMA×PBダブル資格者に聞く」バックナンバーは、[協会ホームページ](#)＞[プライベートバンカー資格](#)＞[CMA（検定会員）の方](#) からご覧頂けます。